１９８０年5月7日　第三種郵便物認可　２０１３年3月１５日発行　KAS１３９９号

毎月１回１５日発行

KAS マンスリーやまた

自閉症者の地域生活を援助する
社会福祉法人　横浜やまびこの里
〒224-0024　横浜市都筑区東山田町２７０番地

復刻改装東京駅丸の内口駅舎
２０１２年１０月７日撮影

【２０１３年３月号】

▼ＦＭやまびこ	関　まさみ	２
△ＦＭやまびこ番外編　その１	小林　邦子	６
▼ノートンの映画大好き！	ノートン	１０
△自閉症児の親も一日にしてならず	ｍｏｍｏｅ	１２
▼本棚から	野呂　衣美	１５
△ＦＭやまびこ番外編　その２	小山　典孝	１６

◆コラム　（畑中　美紀）　・・・　５
◇よこはま三歩　（小林　知佳）　・・・１９
◇疑問符だらけの現場用語集　・・・１１
◆後援会・編集後記　・・・２０

“大阪くいだおれの旅”報告記

ワークアシストやまびこ　関まさみ

「ワークアシストやまびこ」は自閉症・発達障害の人たちの就労支援を行っている事業所です。

読者の皆さんの中にも旅行の計画を励みに、仕事を頑張っている人がいるのではないでしょうか。「ワークアシストやまびこ」でも旅行を楽しみに日々の仕事に取り組まれている人が多くいます。今回はそんな利用者との宿泊旅行についてご紹介します。

■旅行先の選定

今回は、利用者４名、職員２名のグループによる旅行です。

「利用者が楽しめるのはどんな旅行か？」を考えるにあたり、まずは参加する利用者４名がそれぞれ好むことをピックアップすることから始めました。「電車を見るのが好きな人」「飲食が好きな人」「地方に本社がある企業や百貨店が好きな人」などさまざまな趣味趣向を持っています。

行先の候補をしぼるために、旅行代理店への相談と並行して、インターネットでの情報収集も行いました。そうして集めた情報を基に、利用者それぞれの好みに合わせて、今回の旅行では、「プチ贅沢」「遠出」「ご当地グルメを楽しむ」と３つのテーマを決め、それらを網羅する場所として行先を『大阪』に決定しました。

■１つ目の旅行テーマ「プチ贅沢」

普段の生活ではあまり経験できない少し贅沢な体験として、今回は『ホテルのスイートルームに泊まる』ことを１つ目の目的としました。

今回の旅行は平日だったため、通常よりもかなりお得な料金で大きな部屋に宿泊することができました。

ベッドルーム２つ、応接セットがある広いリビングルームが１つ、バスルーム２つ、シャワールーム１つ、トイレ４つ、TV３台、ソファ２か所、書斎エリア・・・豪華な調度品があり、とにかく広い部屋で大人６名でも悠々と過ごすことができました。

豪華なスイートルーム

初めての場所でも、普段の休憩中と変わらない過ごし方もできるよう、一部の人たちには、移動中の車内や部屋で読むための新聞や雑誌を持参してもらい、道中でも購入しました。何もしない（決まっていない）時間よりも、「これをして過ごす」と明快な活動がある方が安心して過ごせる人が多いのです。

そのため、ホテルの室内でくつろいでいる時間は自由に過ごしていましたが、何をしたら良いのかわからない人には、職員から過ごし方の選択肢を個別に提案し、利用者に選んでもらいました。新大阪駅で購入した新聞・雑誌（関西限定バージョン）を広げてじっくりと見ている人、関西ローカルのテレビ番組を選んで観ている人、広い部屋のソファを順に座って楽しんでいる人・・・、広い豪華なスイートルームをそれぞれの楽しみ方で満喫していました。

■２つ目の旅行テーマ「遠出」

駅弁も長旅の楽しみです♪
好みのものを選びました。

今回一緒に行った利用者たちは、旅行の経験はありますが、遠方への旅行となるとその頻度は少ないようでした。ご家族からも「せっかく行くなら、普段行けないところへ行くのも良いのではないかしら？」との意見も聞かれました。年に一度の大イベントです。“せっかくだから（思い切り）大阪食べ歩き”を計画しました。

しかし、職員の無理なチャレンジは利用者にとっては負担を強いることにもなります。知らない大阪の街にでかけるため、「これから何が起きるのだろう？」と利用者たちが予測できるように、『旅のしおり』を準備して旅程を伝えました。

利用者の理解にあわせて、『旅のしおり』には日程、持ち物、各日のスケジュールなどを明記しました。普段から作業活動において個別スケジュールを活用しているため、活動（行動）の順序、時間、内容が示された『旅のしおり』は、見通しを持つための手掛かりとして肌身離さず使用していました。旅行では予定通りにならない出来事もおこりますが、やむを得ない変更があっても『旅のしおり』を使用して示すことができます。

旅行は９月に実施したため残暑が厳しく、初日の散策コースでは予想以上に時間がかかってしまい、利用者も疲れた様子が見られました。そのため予定していた散策場所を１か所中止することにしました。涼しい場所に移動して『旅のしおり』に予定の変更を書き込み、職員から「変わりました」とだけ端的に伝えたところ、次の活動も明確だったこともあり、急な変更も問題なく行えました。

自閉症の人たちはその障害特性として、言葉でたくさんの情報を理解するより、目で見て理解することが得意な人が多いのです。地域活動や今回の旅行でも『旅のしおり』のような目で見てわかるものを使用する方が、言葉のみで変更を聞かされるよりもわかりやすい伝達方法なのだと実感します！

■３つ目のテーマ「ご当地グルメを楽しむ」

大阪といえば『粉もん』ということで、お好み焼きを含めたコースメニューをテーブルで焼いてくれる人気店を予約しました。本当に大阪グルメは安くてボリュームが凄いですね！

ホテルからお店への移動中、有名なグリコの看板前や、くいだおれ人形前で記念撮影もしました。

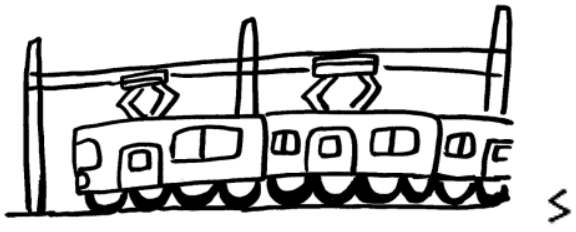
グリコポーズ！

インターネットで大阪グルメを検索すると、『551 蓬莱の豚まん』なるものを発見しました。いわゆる肉まんですが、コンビニなどで見かける肉まんよりも小振りのものです。名物でもあり、利用者にも食べてもらいたいと思っていたところ、同メーカーで『豚まん作り体験』を実施しているとの情報をキャッチ。ぜひチャレンジしたいと思い、体験教室を申し込みました。

体験教室では「豚まんの皮を伸ばす工程」と「肉餡を包む工程」の２つにチャレンジしました。

あらかじめ用意された豚まんの皮のタネを、決められた分量に量るところから始まります。デジタル式の量りを使って、タネが少なければ足し、多ければ減らす調整をおこないます。そして〇グラムと決められた分量まで加減を繰り返します。食の動機は絶大で皆さん絶妙な加減でやりこなしていきます。肉餡も同様に分量を量り、調整しました。続く肉餡を包む工程は、皮の持ち方から始まり、肉餡の詰め方、皮の包み方などお店の方が職人技で見せてくれ、見様見真似で手がけます。とても難しい工程ですが「食は強し！」です。みごとに作り上げ、全員がオリジナルの手作り豚まんと焼売を持ち帰りました。

豚まん作り体験



旅行後、自宅で視ていたテレビ番組で大阪特集が流れた時に、「大阪、御堂筋線、旅行で乗った。」と家族に話した利用者がいました。電車が好きな人なので、暑い中の移動は大変でしたが楽しんでもらえたのかなと思うと嬉しくなります。

初めての出来事も、困ることや苦手な事には配慮することで成功経験として重ねることができ、利用者の違う一面を知ることができる旅行でした。私は支援をする側ですが、一緒に楽しむ自分がいてとても新鮮に感じました。

利用者のみなさん、次の旅行のテーマは何にしましょう

～コラム～

昨年の４月から横浜市発達障害者支援センターに勤務している畑中美紀です。ピッカピカの新人ですが、利用者から「そ、そ、そんなに年をくってらっしゃるんですか！」と驚愕されるぐらいの年齢です。

職場の近くにおいしいカレー屋さんがあると支援センターの職員から聞き、利用することとしました。そのカレー屋さんは、テイクアウトを待っている間、空いた席に座らせて、チャイをごちそうしてくれる、という気の利いたサービスを提供してくれます。

ところが、当センターの別の男性職員が利用した際には、空いた席に座らせてももらえず、チャイも出てきませんでした。客が男か女かの違いではないか、という熱い議論も交わされましたが、私が居合わせた男性客は、しっかりと席につき、チャイをおいしそうに飲んでいました。

サービスの不平等さは、このほかにもあります。私がランチメニューにないバターチキンをオーダーした際には、女性店員の方は快く応じてくれましたが、別の機会に、男性店員の方に同じようにオーダーした際には、「ランチにバターチキンはないね。２００円払うならオッケーよ」とあっさり言われました。「前回は無料で対応してくれたのに・・・」と一応言ってはみたものの、「ほんとに～？」と怪訝そうな顔をされたので、すぐに折れ、２００円を払いました。

これからもあらゆる不平等なサービスが繰り広げられることと思いますが、あの美味なバターチキンのためなら、通い続ける覚悟はできています。

横浜市発達障害者支援センター　畑中美紀

FM やまびこ　番外編　その1

振り返る道向かう道②　～幼児期の俊文と兄～

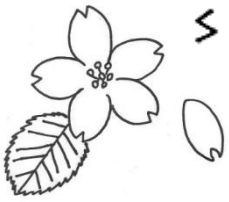
小林　邦子

最重度自閉症の息子俊文は３月で４７歳。世間の理解は得られなかった幼児期、少年期。東やまたレジデンス入所という大きな幸運をいただいて１６年。ようやく適切な支援指導をいただくようになり、現在は穏やかな日々を過ごしている。母親の私は高齢者の域に入って改めて振り返る。

昭和 44 年に俊文の兄が幼稚園に入園し、保護者が当番で送迎をしたが、俊文を連れていてはたいへんだろうと、当番表から私の名がはずされた。自分が望んだのではなく勝手に母たちが決めたのだという憤りが胸内に残り、日々の集合場所で私は誰にも礼を言わなかった。礼儀知らずをいまさらに省みるのだが、親が参加する園の行事があるごとに、俊文をかかえる大変さに直面することになる。

園の誕生会の兄の生まれ月に俊文と参加した。俊文にとって魅力いっぱいの遊具がガラス越しの園庭に見えている。外に出ようと夢中になっている俊文をおさえきれず、誕生会の途中で帰るしかなかった。兄には担任のせんせいが付き添ってくださったが、翌年も親は不参加で、運動会にも生活発表会にも出てやることができなかった。遠足のみは俊文を連れて参加し、遊園地や動物園で兄と共に楽しませることができた。

兄が気管支ぜんそくを発症した。乳児期よりアレルギー体質であったが、ぜんそくは突然だった。病院に行ったが注射１本のみ。横になると呼吸ができないと苦しみ、積み上げた蒲団を背もたれにして一昼夜を過ごすのだが、３日３晩続いたこともあり、これが月に１度起きる。その間、外に逃げ出してしまう俊文を追いかけまわす。私は緊張と睡眠不足で疲労困憊し、２人を道連れに死んでしまおうかと思うことも度々である。何とかこらえることができたのは、若い頃に山岳会に所属していて、命懸けの登山を何度もした経験からだったと今でも思っている。山仲間に「自分がもう駄目だと思うと本当に駄目になってしまうのだ」と教えられて、あきらめなかった。あの苦しさを思えばなんでもない。かならず良いことが待っていると自分に言い聞かせて兄のぜんそく発作を乗り越えた。



小児療育相談センターには月に１度通っていたが、自閉症のこどもたちは、４～５人ずつ幾つかのグループに分けられている。その父親たちが一堂に会して寄り合うという案内書をいただいた。センターに通い始めて１年余り経た頃である。１回目が勤め帰りの夜間に設定されてセンターで開かれた。わが家でも夫が会に参加したが、自閉症について得た学びと、仲間が存在することの安堵感を語り、今後も会合に参加すると言った。しかし夫は関西に単身赴任となったため、夫が会合に参加したのはこの１度のみで終わってしまったのは残念だった。

２回目は休日の昼間に開かれ、療育センター４階のプレイルームでこどもを見てくださるということで、俊文を連れて母親の私が参加した。センター３階のロビーが使われ、両親での参加も多く熱気ある会合だった。この会を立ち上げたのは田村君のお父さんたちで、現在やまびこの里の評議員の中心的存在である田村紀子さんのご主人である。この会はその後、神奈川県自閉症児者親の会に合流する。

昭和４５年、大阪万博が開かれた。関西に単身赴任中の夫が、宿がとれたから見に来いというので、４歳の俊文と５歳の兄をつれて大阪まで行った。俊文は新幹線の窓に張り付くばかりにして景色をながめ、あきもせず座席で過ごした。

ようやく予約がとれたという旅館を俊文は嫌がって、電灯を暗くすると「イヤダー、イヤダー」と泣きつづけた。「イヤダー」はこの時のみの発語である。

翌朝、夫は会社に行き、私とこどもたちは万博を見て廻った。俊文は兄と共によく歩き、行列にも加わって、エキスポランドの汽車やメリーゴーランドを楽しみ、カメラを向けると嬉しそうに笑った。この頃まではなんとか母の手に負える子供であったと思う。

七五三の祝を世間並みにしたいと思った。兄は１１月末の生まれなので、ぎりぎりの満５歳で、俊文は数え年５歳。２人の祝を神社で一緒にすることにした。兄と俊文にブレザーを着せ、私は祝い事の定番、色無地に黒羽織とした。和服では俊文に逃げられたら追いつけないので、瞬時も俊文の手を放せない。駅で切符を買うためにバックからお金を出すのもすべて片手で行う。電車バスを乗り継ぎ、紅葉坂の伊勢山皇大神宮に行った。おはらいを受けるのは無理だろうと賽銭で済ませ、千歳飴の袋を下げてふたりが並んでいる写真を撮りたいと思ったが、これも無理。ホットドッグを屋台で買い、俊文が石段に腰をおろした隙に、兄が千歳飴を下げている姿を撮った。俊文は神社の石段に腰かけてホットドッグを食べている七五三の写真となった。

夫の実家は横浜の京浜急行沿線にある。夫は長男で妹がいるが、私たちが結婚３年後には実家で親と同居する約束だった。しかし多動の俊文が居ては実行できず、相鉄沿線の町で借家住まいを続けた。農家の人が畑の一角に建てた１棟２軒の６棟ほどの借家で庭を広くとっているが、囲いがないので１２世帯の小部落の感である。どの家も若夫婦と乳幼児という家族構成だったが、時代は高度成長期の好景気。次々に自宅を購入して借家を出て行った。

向かいの家にＳさん一家が転居してきた。男児２人がいて、Ｓ家の長男とわが家の長男とは小学校入学を直前にした同じ年齢だったので、２人はすぐに仲良く遊ぶようになった。互いの家に囲いがないため、庭続きの家という感じで、雨の日などは弟君もやってくる。弟君は俊文より１歳下だが俊文の玩具に興味を持ち、俊文がブロックで遊んでいると、弟君が脇から１つ積む。俊文は笑ってその上に積んだりして遊び、４人が兄弟のように過ごす。雨の日は思いがけない安らぎを得られるようになった。

Ｓさんの家族４人はそれまで別々に暮らしていたという。Ｓ君兄弟の生母は３年前に病死したため、Ｓ君(兄)は父方の親戚の家に預けられ、弟君は母方の祖母に育てられた。Ｓさんは子育ての経験がないまま２人の母親となった。Ｓ君は他県の親戚の家を転々と預けられていたそうで、「ぼくは次にどこに預けられるのだろう」と不安気に私に聞く。環境の安定してきた日々に、自分がまたどこかに預けられるかという不安が逆に大きくなるのだろう。「もうお父さんもお母さんも居るし、家もあるのだから大丈夫よ」と教えるのだが、常に不安そうな表情である。Ｓさんの話では、Ｓさん夫妻が普通の会話をしていても言葉の端をとらえて「いま２人で、ぼくをどこかに預ける話をしていた」と声をあげて泣き出すという。Ｓさんはほとほとに悩み、私はいつも聞き役となった。Ｓさん夫妻は、わが家の兄を家族の一員のように接してくださった。兄が居るとＳ君も精神的な不安を見せないと言って、家庭での誕生会や家族のドライブなどにも連れていってくださった。わが家では俊文を連れて外出することが多くなっていたので、その間は兄を心配することがなく助けられた。Ｓさん一家との仲らいは３０年以上も続くのである。

Ｓ君とわが家の兄が小学校に入学し、２人は同じクラスになった。通学するようになってＳ君はようやく自分がよそに預けられる心配がないことをさとったようだ。兄とＳ君は、共に平穏ではない我慢を強いられる幼児期を過ごしたせいか、２人は気が合って登下校も一緒である。Ｓ君はもともと活発な外遊びが上手な子供だった。キャッチボール、かぶと虫やザリガニ捕りなど、２人でよく遊ぶ。兄は外遊びが増えたせいか、持病の気管支ぜんそくが自然に治癒してしまったのは有難かった。

俊文は次第に動きが激しくなってきた。月１度通う小児療育センターで、母親たちと「もう、まばたきもできない」と語りあった。親がまばたきをする間に逃げ出して、行方不明になってしまうというのである。兄とＳ君が小学校に入学し、Ｓ家の弟君も幼稚園に通うようになって、５歳の俊文は取り残されたように庭でブランコ遊びをする毎日であった。庭といっても囲いがないため、どの方向にも逃げることができるので目が離せない。俊文はこの日も１人で乗っていた。その間、家の中から目を離さずに家事をするのだが、一瞬目を離した隙にブランコの音が止まった。俊文が右に出たか左かによって、まったく違う道に出てしまう。右には柵があるが簡単に乗り越えてしまう。いつもは親の勘で、すぐに追いつくのだが、この日は初動を誤った。バス停や公園を探したがどこにもいない。警察に迷子の届けをし、Ｓさんに電話番を頼んで走りまわった。

お昼前に姿を消し、見つかったという連絡が警察から入ったのは、６時過ぎである。後に知ったのは、当時は迷子の手配は横浜市内に限られ、６時間経つと全国一斉手配になり、そこで市外での消息がつかめたという。俊文は徒歩で 25 分ほどの相鉄の駅までゆき、電車に乗ってしまったのだ。当時の改札は駅員が切符を切っていたのだが、大人についてすり抜けたのだろう。30 分近く乗って終点の海老名駅で降りたようだ。俊文はそこで飲料用の噴水を思い切り吹き上げて、ぴょんぴょん跳ねて喜んでいたという。保護者が居ないことを確かめた駅からの連絡で、警察から厚木の児童相談所に保護され、５時以降は宿泊施設のある川崎の児相に移されていた。当時、川崎市は政令指定都市ではなかったので、指定都市の横浜市を越えて、県管轄の川崎児相に移されたという。隣家のＹさんのご主人が丁度帰宅されたので車を出してくださって、川崎まで引き取りに行った。俊文は不安だったのだろう。母の姿を見てこの時はすがるように母の腕につかまってきた。俊文のひとり外出による大騒動の結末であった。

ノートンの《映画、大好き！》

「がんばれ！ベアーズ」（1976年）

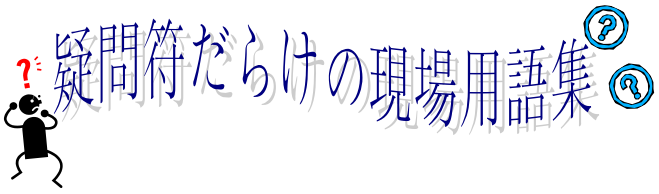
今年もはや 2 月も終わりました。昨年の暮れぐらいから、感染症対策で追われていたのですが、ここにきてやっと落ち着いてきました。ノロウィルスにインフルエンザ。これまでにもあった感染症なのですが、このところの感染症対策はいささか過剰過ぎるのでは？と首をかしげたくなります。確かに感染症への予防と対策はしっかりと考えておくべきですが、対策のために色々なことが制約される環境にいるとしんどくなります。特に施設のような団体生活をしている場所では、過剰な対応がとても息苦しく感じてしまうのです。過剰な対応をすることで、どんどん人の免疫力も落ちていっているような気もします。今流行のことばで表現すると、リスクマネジメントとか、施設コンプライアンス事項とかになるのでしょうか。なんだか世知辛い世の中になってきたなと感じたりして、ビールを一杯。ビールでウィルスなんか消毒してやりましょう！と変に意気込むノートンです。

そんなこんなで、バタバタした時期が続いていたので、あんまり映画を鑑賞できていません。アカデミー賞の季節で、気になる映画はたくさんあるのですがね。これから、徐々にペースを上げて映画を鑑賞したいと思っています。そんな状況ですが、この間テレビで久しぶりに観た映画に感動したので、その作品を紹介しましょう。「がんばれ！ベアーズ」(1976 年)です。

では、簡単にストーリーを・・・

元プロ野球選手で酒飲みのプール清掃人バターメーカー（ウォルター・マッソー）は、地元市会議員に、少年野球リーグの新チーム『ベアーズ』のコーチを依頼された。コーチをすることで酒の飲み代を稼ぐことができるという理由で、彼はその話を引き受けたのであった。最初は適当に少年野球と付き合うつもりであったバターメーカー。しかし、同じリーグの他チームに馬鹿にされ続けるベアーズの少年達を見ていると、何とかチームを強くし、他のチームを見返してやりたいという気持ちが彼の中で強くなってきた。チームを強くするため、以前付き合っていた恋人の娘でピッチャーの素質があるアマンダと、地元の不良だが運動神経抜群でスラッガーのケリーをスカウトする。有能な選手が揃ったことでベアーズの快進撃が始まった。そして、リーグ優勝決定戦への出場も見えてきたのだが・・・。

この映画を最初に観た頃は私も小学生で、コメディー少年野球映画としてとても楽しい作品だったという記憶がありました。けれど、単なるコメディー映画ではなく、親子のつながり、チームワーク、人間教育までがテーマとして入っていることに気づかされました。体罰問題でスポーツ界は色々と問題が浮き彫りになっていますが、スポーツを指導するスタッフはこの映画から学ぶことも多いのではと感じます。なかなかの秀作です。ぜひ、ご鑑賞ください！



～その48～　人材の流出

私は福祉施設や自立支援法の事業所にコンサルテーションに行くことがよくありますが、どこの職場でも聞かれるのは、「スタッフが集まらない」「すぐに辞めてしまう」「人手不足で大変」という話です。そして、心ある管理職の皆さんは、どなたも人材育成や人材確保がとても重要だという認識を語られます。

一方で、私は、現場の特に若手スタッフからいろいろと仕事の相談を受けたり、愚痴を聞かされたりすることもよくあります。「早く辞めたい」「他にもっといいところはないか」「仕事がきつい」などなどです。

スタッフの皆さんは福祉の仕事がしたくて集まってきたはずですが、入ってみたらその職場は理想の仕事から大きくかい離していたと。理念なき組織、拙い戦略、利己的な集団であるなら、福祉の人材は流出して当然でしょう。

若手の現場スタッフがよく語る職場の不満には次のようなものがあります。

＜教えてくれない＞　＜手伝ってくれない＞　＜話を聞いてくれない＞　＜決めない＞

＜押し付けられる＞　＜すぐにダメだと否定される＞　＜仲間がいない＞

＜外の人と話ができない＞　＜雑用ばかりさせられる＞　＜将来の見通しがない＞

つまるところ、「やりがいのない仕事」をさせられている、という体験と感情が渦巻いています。そして、中には「どうせ頑張っても意味はない」と割り切ったりふてくされたりして、最低限の仕事を最低限のエネルギーでこなすような人材ができあがります。逆に、真面目な人は「このまま頑張るしか仕方がない」と諦めの気持ちで無理に無理を重ね、その結果、バーンアウトしたり体調を崩したりして職場を去っていきます。

このミスマッチ、あるいは悪循環の構図から脱却するにはどうしたらいいでしょうか？　実は簡単なことです。現場スタッフたちの声に真摯に耳を傾け、

＜きちんと教える＞　＜あれこれ手伝う＞　＜話を聞き＞　＜責任をとって決める＞

＜押し付けず＞　＜いい意見やアイデアがあれば積極的に採用し＞　＜仲間を見つけ＞

＜外の人と話す機会をたくさん設け＞　＜雑用はみんなで分担し＞　＜将来のビジョンを語る＞

と。そういう手だてを打っていくことです。

施設の管理職や職場の上司の方々にお願いしたいのは、人材育成や人材確保が大事と思うなら、嘆く前に、具体的な対策を講じないといけません。「やりがいのある仕事」ができるよう、自らが率先して職場を変えていく必要があります。求人広告を出せば人が集まるものではありませんし、個別面談をしたところで辞めたい気持ちが劇的に変わるものでもありません。

ここの職場で働いて「自分は成長したな」「手ごたえを感じる」「面白い」「もっと勉強しよう」「もっとやってみよう」とスタッフが実感できれば、それが人材の育成になり確保につながっていきます。いい仕事をしたいと思っている人はたくさんいるのですから。

＜横浜やまびこの里専門員　自閉症eサービス代表　中山清司＞

自閉症児の親も

一日にしてならず。

ペンネームは
ｍｏｍｏｅ

★momoeさん紹介★
知的障害のある人の地域生活支援をする特定非営利活動法人の理事です。首都圏通勤圏にある某市に夫と夫の母親（要支援 2）、専門学校 1 年の長男と所属法人で新規に設立した作業所 3 年目・21 歳で知的障害と自閉症がある（療育手帳で最重度、障害程度区分 6）の次男と暮らしています。

発災時支援への取り組み　の巻（前編）

２０１０年２月～　私の住む市で「災害時要援護者支援プラン」が策定され、＜在宅で、「地域の支援者へ個人情報を提供することに同意」する人＞が要援護者として登録できることになった。障害者（身体１・２級、知的、精神１級）は障害福祉課が要援護者名簿に登録し、町内会・自治会・民生児童委員・地区社協などに名簿を提供するということであった。

私も私の仲間も、いろんな形でカミングアウトをしており（いまさら隠すような状態ではないと思い）、早速必要事項を記入したものを障害福祉課に郵送した。名簿は４月以降地域に配布されるということだったので、「民生委員さんが訪ねてきてくれるのはいつだろう？」と次男の支援に関する資料を整えて心待ちにしていた。ところが半年過ぎても誰も訪ねてきてくれず、仲間に聞いてもリアクションがあったというところはどこにもなかった。

市内５つ（当時）の障害者福祉の団体で構成する障害者施策検討連絡会で確認したところ、名簿は単に郵送などをしているわけではなく、個人情報を扱うことに関しての説明をきちんとしたうえで、それを了解した地域のみが配布対象だということで、市内の６割程度のところしか受け取らなかったという説明だった。つまり私や仲間の地域の町内会は受け取っていない可能性があるということだ。

２０１１年３月～　そんななか、東日本大震災が起き、市内でも防災に関する講演会やシンポジウムが頻繁に開かれるようになった。障害者施策検討連絡会でも災害時要援護者プランについて再度課題を洗い出し、現在も何度となく障害福祉課だけではなく担当課（市民安全部危機管理課）への要望や懇談を設けている。

２０１１年１１月　私たちの会が所属する市民集会で東北への支援に入った当事者の会の方（車椅子ユーザー）を招いて、講演会を開いた。多くの車椅子ユーザーの方が犠牲になり、その方々にお話を聞くことはできないが、「周りの方を思い、その場に残ったのではないか」という話があったそうだ。そのほか現地に入ったいろいろな団体の報告などからの課題も盛り込み、市長あての要望書を作成、１２月には直接提出と懇談をした。

２０１２年3月１６日　災害対策本部で開かれた防災会議を傍聴する。行政・公共機関・インフラの町など２９人の出席。議題は震災当日の対応、震災後の取り組み状況、地域防災計画の改定に向けての意見、今後のスケジュール。平成２１年に改定された防災計画を３月末に改定される県の計画に合わせて２４年末までに改訂版を作成するとのこと。計画のなかの福祉避難所関係はほんの一部分なので、いかに運営マニュアルを充実させていくかをちゃんと追いかけていかないといけないなと思う。しかし、県の改定を待っていたとはいえ、丸１年間改定への動きがなかったというのはビックリ・・・

２０１２年3月２１日　私の住む地区にある、主に身体障害のある方を支援する施設で、継続的に東北支援をしている市内の重心さんを支援する施設の施設長を講師に呼んでの学習会が開かれたので参加する。１１月の当事者さんの立場からのお話とはまた違う、継続的に支援をしている立場からの課題の指摘はさらに大きくまた詳細なものだった。とりあえず命が助かったそのあと、毎日三食おにぎり１つしか配られないという中、近隣とのお付き合いをしていたおかげで温かい汁物を作る材料を頂けたという話などは、「日常生活の延長線としての発災時支援」を実感した。

２０１２年7月7日　定例の市民集会を開催。上記３月２１日の講師の話をいろんな人に聞いてほしくて、講師にお願いする。後半のシンポジウムでは市の担当課と市内でも先進的な取り組みをしている町内会の防災担当の方にお願いして現状を話してもらう。どこの町内会・自治会でも役員は高齢の方で、自分の身も守りきらないのに体が元気な知的障害のある人まで面倒みられん、というところだろうが、この町内会は日中働いている人でもその人の得意分野を名簿とともに記載し、在宅時の発災時には力を発揮してもらいやすいようにしている。また町内の中学校や高校の生徒とのお祭りを通しての交流から要支援者支援をともに行う取り組みをしている。先進的なところの話を聞くと、それと比べてうちの地域は・・・とがっくりしがちだが、よそでできるなら私のところも、と町内会に入り込む「心の」きっかけにしたいところだ・・・

２０１２年１０月２６日　防災計画がパブリックコメントに出されたので、担当課に来てもらって説明および質疑（要望）をする。福祉避難所については障害福祉課担当なので、市民安全部に詳細について要望する場ではないということで、障害者だけでなく必要になる人も多い薬の備蓄や医療体制について確認する。担当者も「ちょっと見逃していたポイントなので、検討する」という返答だった。会員には喘息や発作があり、個人的には一定以上処方してもらえない不安を持つ家族もあるので、直接言える場が設けられたのは良かった。言うまでもなく知的障害や自閉症をはじめとする発達障害というのは一人ひとり違い支援方法も違うので、会員一人ひとりがちゃんとわが子の「代弁」をしないといけないのだが、まだまだ当事者が頑張らないと場がないというところだ。

本棚から

「困ってる人」

大野　更紗　著　　ポプラ文庫

これは、難病を発症した著者が「困ってるひと」について書いた本です（ブログや雑誌の記事等でご存知の方も多いかもしれません）。しかし、冒頭に「これは闘病記ではありません」という記述があるように、病について書いた闘病記ではないのです。

著者の大野更紗さんは大学でビルマ（ミャンマー）難民に興味を持ち、実際にビルマ国境にも行き、難民の支援をしていた人です。その彼女が大学院進学後しばらくして身体の不調に見舞われます。いくつかの病院に行っても病名も分からず、体調も良くならず･･･動かない身体に生活もままならない状況において、彼女は自分が医療難民かもしれないと考えます。「難」の観察者から「難」の当事者になったことに気づいた彼女が生きるための闘いを始めた時、参考にしたのはやはりビルマ難民の生き方でした。

毎日が生存のための闘い、絶望はやさしく手招いている。それでも私は絶望しないと言う彼女からのメッセージ。その一方でデートのためにおしゃれをし、主治医に隠れて引越しを強行（入院中）する、等身大の２６歳の彼女。

共感する部分、考えさせられる部分、励まされる部分、読む人によって感じるものは異なるかもしれませんが、何か困難を感じたとき、誰かが困っている場面に立ち会ったとき、「エクストリーム困ってるひと」の彼女の言葉は、困っているひとを助けてくれる言葉ではないかと思います。

ちなみに、３月には２０１１年以降の記事をまとめた新刊「さらさらさん」（ポプラ社）も発売予定です。

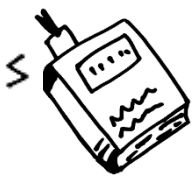
「アフリカにょろり旅」

青山　潤　著　　講談社文庫

先日、ニホンウナギが絶滅危惧種に指定されたとのニュースを聞きました。世界には１８種類のウナギがいるらしいのですが、この本は、１７種類のウナギを採集した東京大学海洋研究所、「ウナギグループ」のメンバー３名が最後の１種「ラビアータ」を求めてアフリカを旅する冒険譚です。小悪党と腕相撲をしたり、「ウナギは摂れたけど食べちゃった」との情報の元に地面をひたすら棒で掘ったり･･･。安全かつ確実にウナギを採集・帰国することを目的とした、陸路国境越えを4回、密入国を2回、ざっと4，151キロの旅。

２００６年、東京大学海洋研究所はニホンウナギの産卵地をほぼ特定。世界的な注目を集めました。「誰がなんと言おうと、やっぱり冒険は必要だよ」という先生を筆頭としたウナギグループの活躍を是非ご覧ください。

〈野呂　衣美〉



FM やまびこ　番外編　その2

異動してわかったこと

ハウス DOUX　　小山　典孝

■はじめに

私は「横浜やまびこの里」に２０１０年に入職し、今年度で３年目の職員です。初めは「まろんワークス」という通所の生活介護事業に配属となり、そこで２年間勤務しました。そして２０１２年４月から「ハウスＤＯＵＸ（以下ハウスD）」というケアホームに異動となりました。

「まろんワークス」と「ハウスD」は同じ建物内にあり、一軒家の１階部分が「まろんワークス」で２階部分が「ハウスD」となっています。「まろんワークス」は、１３名の利用者が通所しており、ボールペン組み立てやポスティング等の受注作業、自立課題を中心に活動しています。「ハウスD」には、５名の利用者が入居しています。

まろんワークス＆ハウス DOUX

今回は、異動して私が感じたことを書きたいと思います。

私は、異動する前から利用者の引継ぎ等でハウスDに行き来をしていたため、利用者の顔と名前は把握しており、おこなっている支援の話もハウスDの職員から聞いていただけに、個人的に異動はスムーズに行くだろうと感じていました。それと同時に作業場面から生活場面へと支援内容が変わることは、私にとって少し不安を感じる出来事でもありました。

自分の生活に自信が無く不規則な生活を送っている私が、利用者に良い生活支援が行えるのか、生活支援のアイデアが浮かばないのではないか、と不安に思う一面もありました。

■作業場面と生活場面の違い

わずかな期間ではありますが、作業場面と生活場面の両方を経験して感じたことがあります。作業場面は、日中仕事をする場所という位置づけがあり、業者から請け負った受注作業を中心に提供しているため、ある程度活動が限定されやすいという面があります。一方、生活場面は決まった過ごし方という制限がない分、十人十色の生活であるという違いを感じました。

作業場面の職員は利用者の作業面を主に支援しています。全ての利用者ができるだけ受注作業に参加できるよう、それぞれの得意な面と不得意な面を把握し、受注作業の工程をそれぞれの得意不得意に合わせて分担したり、ジグ（補助具）を用いて一人でも作業が行えるような配慮をしたりしています。また、きちんとした製品になるよう、製品の検品を行い完成度を上げる工夫をしています。

作業以外にも受注作業の納品や、みんなで使う手拭タオルの洗濯やたたみ、休憩時にお茶を飲むためのコップの準備や洗浄などを行っています。これらの活動は、日課の中で必要な役割を分担して行うという目的の他に、家庭やケアホームでも応用できるような活動の提供を意図して行っています。

職員は支援にあたって、利用者ができるだけ作業に集中できるような環境調整と対応を意識しています。

例えば、作業中に物の位置を気にして席を離れ、物の位置を直すことに夢中になってしまうような状況があれば、気になる物が目に入らないように、目隠しで隠したり物の位置を変えたりといった配慮や、今は作業の時間であって他の事をする時間ではないことを伝えて作業に戻ってもらう対応をしています。

その場合も、何が何でも作業に戻ってもらうのではなく、例えば予定が気になって作業が手につかない場合には、家庭やケアホームと相談した上で時間をとって利用者にきちんと予定を伝えるなど、一人ひとりの状況や特徴に合わせた配慮や対応を行っています。

一方、生活場面の職員は、入浴や夕食、睡眠といった生活面の支援や介助、生活スキルの向上を目指した支援をしています。そして、利用者がリラックスして過ごせるような振る舞いを心掛けています。

私がまず、異動して引き継ぎの職員に言われたことが、「座ったら」ということでした。これまで作業場面では、支援をするときに座る習慣が無かったため、私は何をするにも無意識に立っていました。指摘されたことで、生活の場で無意味に立っていることのおかしさに気づかされました。生活の場であるはずなのに、近くで立たれていたら落ち着かないですし、職員がリラックスしていることが利用者にも伝わるということ、利用者がリラックスする環境を作るにはまずは自分からという振る舞いを教わりました。

生活場面での利用者の過ごし方を見ていると、作業場面と対照的に「こう過ごさなければいけない」ということがなく、各々がゆっくり休息したり余暇を楽しんだりと自由な過ごし方があることを知りました。

■それぞれの場面で関わる人びと

作業場面での、印象的なエピソードに受注業者とのやり取りがあります。受注業者の方が直接利用者と関わる機会は少ないですが、仕事をいただく上では欠かせない関係です。受注先はいくつかあり、納品時に製品作成の注意点や完成品見本の指示を受けたり、納品日や製品数の調整をしたりしています。

以前、いつも納品に同行している利用者がいない時に「今日はどうしたの?」と業者の方が気にかけてくれることがありました。また、ある日の納品時に実は次の仕事が用意されていなかったのですが、次の仕事があると思っていた利用者が材料を運ぶために待っている姿を見て、業者の方が急遽、他に渡すはずだった仕事を回してくれたこともありました。納品時に利用者が同行することで顔なじみになり、製品の精度を上げることで信頼してもらえるようになって生まれたエピソードだと思います。利用者が業者と良い関係をもつこと、地域で生活することとはこういうことなのかと感じた出来事でした。

作業場面（まろんワークス）の様子

作業場面も生活場面も、職員だけでなく主婦や学生、地域の人たちのアドバイスや意見を聞き、利用者支援に活かしています。職員として専門的な知識を身につけていくことは大切ですが、その一方で日常生活の中の当たり前のことが見えにくくなる可能性も考えられます。いろいろな人と関わることで、チームで利用者支援に取り組むことの大切さを感じました。

生活場面（ハウスDOUX）の様子

■それぞれの場面で共通していること

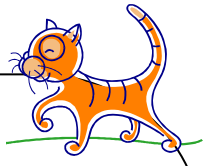
ここまで、作業場面と生活場面の違いを述べてきましたが、両方を経験して共通する部分があることにも気づきました。一人ひとりの特徴に合わせた支援を行っていること、自立して活動が行えるように支援を行っていること、地域にある資源を利用して生活できるように支援していること等、場面が変わっても一貫した利用者支援を行っていることを改めて感じました。

■まとめ

利用者にとっての作業場面と生活場面の役割として、昼間は社会へ出て働き、夜や休日は自宅でリラックスし、趣味等の好きなことをして過ごすことがあると思います。異動を通して、作業場面と生活場面の両方がバランスよくあることが、利用者にとって生活のリズムを生み、安心・安定した生活を過ごせるためにも必要なことだと感じました。

また、場面が違っても一人ひとりの特徴に合わせた配慮をすることは同じであり、一貫した個別支援を行うことが大切であると、体験を通して気づきました。

生活習慣の悪い私は、初めは利用者の生活を支えられるのか不安な気持ちを抱いて異動してきましたが、今は利用者や職員と一緒になって生活力を向上していく気持ちで日々を過ごしています。



よこはま三歩

はじめまして。本年度４月より本牧和田地域ケアプラザで勤務しております小林知佳と申します。どうぞよろしくお願いします。

今回は本牧和田地域ケアプラザもある、中区に位置する横浜公園について紹介したいと思います。横浜公園は実家から１０分程ということもあり小さな頃からよく訪れていました。横浜公園と言うとまず思い浮かぶのは敷地内にある横浜スタジアムではないでしょうか。横浜スタジアムはもちろんですが、横浜公園は公園としても魅力的な場所でもあります。公園内の水の庭園には水琴窟（すいきんくつ）という水の滴る音の聞こえる場所があります。近くに竹筒が設置されており指定の場所にその竹筒を持って行き、耳を澄ませるとエコーのかかったような水の滴る音が聞こえます。癒しスポットです。また、これから春になるととてもキレイなチューリップも見ることが出来ます。

４月より野球の試合も始まるので、野球観戦を兼ねて散歩に行ってみてはいかがでしょうか。ちなみに野球観戦のお供にはハマスタ名物「みかん氷」と「シウマイカリー」がお勧めです。

本牧和田地域ケアプラザ　小林知佳

△▼横浜やまびこの里後援会▼△

横浜市内で自閉症という障害を持つ人たちが地域で生活をするためのサービスを、一つずつ作り出していく活動をしている『社会福祉法人横浜やまびこの里』の活動のバックアップを目的としています。

入会された方には「マンスリーやまた」「後援会報」をお届けします（郵送）

会員種別	個人会員	法人会員
会費	1口　3，000円／年	1口　10，000円／年
入会時期 （定時入会）	7月または1月	
会費納入方法	(ア)7月入会者 7月～12月入会者は当該年度の会費を納入し、次回からの会費は翌年の7月に納入し、以後毎年7月となります。 (イ)1月入会者 1月～6月入会者は当該年度の会費を納入し、次回からの会費は翌年の1月に納入し、以後毎年1月となります。	
振込口座 （郵便振替）	横浜やまびこの里後援会　〈口座番号〉 00240－3－76163	

★後援会のお申し込み・お問い合わせ★
横浜やまびこの里　後援会事務局　　TEL045（591）2728

～編集後記～
今月号のマンやまも、ＦＭやまびこが番外編２本を含めて３本と読み応え満点です。また、今回はＦＭやまびこの「お好み焼き」「豚まん」、コラムの「バターチキンカレー」、よこはま三歩の「みかん氷」「シウマイカリー」と、おいしい話もたくさんです。ぜひ、お腹を鳴らしながら読んでください。（桜井美佳）

表紙写真　ペンネーム：国鉄福私鉄道（こくてつふくしてつどう）
編　　集　社会福祉法人横浜やまびこの里　（編集責任者　小林信篤）
横浜市都筑区東山田町270番地
TEL.045-591-2728/FAX.045-591-2768
法人ホームページ http://www.yamabikonosato.jp/
印　　刷　ワークステーション　横浜市神奈川区西神奈川1-14-6-1F　TEL.045-316-5710
発 行 人　神奈川県自閉症児・者親の会連合会　代表者　内田照雄
厚木市愛甲2-11-6-109
購読料１部　５０円（税込み）